

後 記

はやいもので、昨年「創刊号」を出してから丸一年になる。本学の英文学科は既に二十余年の星霜を閲し、既に幾度か論集が上木されているのであるが、昨年来研究室のメンバーが多く新参者となったので、あえて「創刊号」とした次第であった。「第二号」を出すにあたりこの一年間を振り返ってみるに、まず我々の収穫として挙げるべきは、「学会」の開催であったろう。地方の小さな大学の悲哀で、我々も、又ここに学ぶ学生も何かにつけ勉学の便に乏しく、環境からの刺激に疎遠である。

又ともかくもアカデミックな気風に乏しいのが本学の短所である。そのような意味からも、我々、及び学生の向学の資として昨年来の課題であった「学会」を持ったのであった。講演には熊本大学の和田勇一先生が見え、シェークスピアに就いて熱弁をふるわれ、又研究発表には我々の外に学生が加わるといったところで、初めての「学会」としては満足すべきものであった。ちなみにそのプログラムを記すと――

研究発表

1. ヘミングウェイの「日はまた昇る」に関する一考察
別府大学4年次生 森田高檜
2. ドライサーの自然主義について
別府大学4年次生 岡田輝彦
3. ワーズワースの郷愁
別府大学 助手 後藤一美
4. 入門期英語学習指導に関するノート
別府大学 講師 石田正司

講演

God and Man in Modern Western Literature

別府大学 講師 J. R. Dring

リア王について

熊本大学 教授 和田勇一

となる。とにかく有意義な学会だったと思う。これを機に来年は更に実

りある学会が持たれるよう切望してやまない。

今年も多忙な年であった。全国的な学園紛争の余波を受けて、本学も紛争らしきものを味わった。会議会議に多大の時間と労力を消費し、とかく研究面が閑却されたように思う。大学の機構をもっと簡素化、合理的にし、会議はせいぜい月に一度ぐらいにして欲しいものである。それにしても大学という所は、正しい当り前の理屈も分らずにいて、何かと小理屈、小策を弄するといった迂愚奸智豊けき輩が如何に多い事であろう。道理のイロハも分らぬ者に「研究」とは何の謂ぞ。迂愚奸智の輩が大学を去れば、大学は遙かに実のある、真の「真理」を探求し実践するにふさわしい場となるであろうに。我々にとって物心両面にわたって不利な昨今であるが、その間にも我々の微力が実って「第二号」が出た事は喜ばしい。文学研究は「人間性」の探求に外ならず、研究を通じて我々は自らの人間性を発見し拡大する。それは我々が「真の人生」を生きるよすがとなるであろうし、又、人間研究、文学研究こそ、人類の最初にして最後の研究であろう。

人間こそ、人間にとって最も興味あるものであり、恐らくはまた人間だけが人間に興味を感じさせるものであろう。 (ゲーテ)

終わりにあたって、今後とも我々の研究が一層豊かなものに、自らの心をいくばくなくとも満足させ得るものに結晶せん事を祈ってやまない。
(G)